書評

齊藤誠著
『〈危機の領域〉：非ゼロリスク社会における責任と納得』
（勁草書房、2018 年 4 月）

木　原　　匡

本書は、日本社会での意思決定において、しばしばリスクがないかのように事前に説明されたことについて、事後的にリスクが顕在化した（今後するであろう）ことから、事前の意思決定の正当性に大きな疑念が持たれた問題を、豊洲市場の地下水汚染、地震予知、原発危機、金融危機、財政危機の５つの事例を丹念に検証することによって、その解決策を模索するものである。

周知のように、著者は 2011 年の東日本大震災以来、精力的に福島第一原子力発電所の事故対応についての論考を発表している。本書でもプロローグの冒頭で、福島第一原子力発電所事故についての考察を進める中での著者の考え方の変化が述べられている。本書で提案されているのは、経済学的分析、法的責任の追及の限界を認め、代わって、事後的に社会が納得の得られる方法として「熟議」を採用することである。

本書で提唱されている「熟議」とは、意見の異なる専門家や一般市民が、「ボロボロの無知のヴェール」を被ることによって、ある程度自分の立場を離れて議論を行うことである。最終章である第７章で明らかにされているように、本書で提案されている「熟議」はトランス・サイエンスの領域での課題解決の方法の一つである。そして著者による「虚構の熟議」が地震予知と財政危機の２つの事例について紹介されている。本書のユニークなところは、「熟議」を望ましい結果を生み出すための手段としてのみでなく、「熟議」のプロセスを経ることによって結果的に失敗したとしても失敗を「納得」して受け入れる可能性に期待を寄せている点である。著者が注意深く述べているように、最後の「納得」の可能性についてはあくまで希望的観測としての位置づけであり、社会的に「納得」に至るプロセスが明示されているわけではない。

初読の際には、５つの事例の中で最重要である原発危機について「虚構の熟議」が展開されていないことに物足りなさを感じた。再読して、これは読者自身による「虚構の熟議」に委ねられているのではないかと気づき、自分なりの思考実験を試みた。貞観地震の堆積物を調査している研究者、歴史的地震の文献や断層モデルから津波高を計算した東京電力の担当者、原子力発電所の所長、地域の住民、経済産業省の官僚などが、ある程度自分の立場を離れて自由な議論に参加していたら、どのような結論が生まれ、また対応に失敗した場合でも「納得」が得られたであろうか？　私の頭の中の虚構の熟議では、事象のあまりの複雑さから議論の収束先に到達できな

かった。事象の複雑さとは、例えば、福島第一原子力発電所で今回のような事故が発生したことは、十数メートルの高さの津波が到達するリスクと、津波が到達した条件付きで原発の停止操作を行えないリスクの積であることである。担当している授業の中で、動学ゲームをツリーで表して各プレイヤーが混合戦略を選ぶ場合の利得の期待値を求めようとしたときの教室の騒然とした様子が脳裏をよぎった。さらに津波の高さごとの発生確率などはかなり大きな不確実性がある事象であり、単純な条件付き確率とは比較にならないほどイメージすることが困難ではあろう。一方で、結論が集約されないにしても、生じた結果に対する「納得」はある程度得られるように感じた。また、「納得」があれば失敗からの復興の過程において、今起きている現実よりも時間も経済的な負担もはるかに少なくて済んだのではないか。著書の提唱する熟議を通じた事後的な「納得」には大いなる可能性があるのではないだろうか。

社会科学の範囲を積極的に乗り越えて、トランス・サイエンスとしての解決策に踏み出すことの成否は読み手によって評価の分かれるところであろう。例えばサンスティーン（2012）が、同様にテロや気候変動といったゼロリスクと見做されがちな事例を対象としつつも、費用便益分析や行動経済学の知見を最大限取り入れて、社会科学の領域に踏みとどまろうとしていることとは好対照である。著者はすでに、齊藤（2015）で経済学的、法的に詳細に原発危機に至った経緯とその後の対応を分析している。本書はそこでは解決できなかった問題提起との位置づけであろう。本書と併せて齊藤（2015）も読まれることをお薦めしたい。

参考文献

キャス・サンスティーン（2012）『最悪のシナリオ：巨大リスクにどこまで備えるか』 田沢恭子訳　みすず書房

齊藤誠（2015）『震災復興の政治経済学：津波被災と原発危機の分離と交錯』 日本評論社